

## R . H . ブライズの俳句観：蕪村論

## R.H.Blyth's View on Haiku: Buson

上田 邦義・氏家 飄乎

UEDA Kuniyoshi・UJIE Hyouko

---

Abstract: This discussion follows “Bashō” printed on No. 4 of this Bulletin. 1) In his *HAIKU* Vol. I, R. H. Blyth deals with Buson rather simply after a long and devoted discussion of Bashō. 2) Blyth says he is “struck with the difference of the depth of their poetical life.” “In Bashō the thing, its nature, is expressed in a kind of onomatopoeia, which may be deeply spiritual. Voiceless things speak in the cadence of his verse.” In Buson “the river does not echo through our whole body.” “Buson was primarily a poet of the eye,” and he “lived in the world of phenomena”, “it is the thing-as-it-is, but not the Thing-as-It-is.” “The Thing-as-It-is” is the world which Blyth discussed in “Basho,” in which Aldous Huxley was interested. Blyth concludes “Buson follows Bashō, Shiki follows Buson, but Bashō and Issa imitate no one; their life is their own.”

---

Keywords: Blyth, Haiku, Bashō, Buson, Issa, A. Huxley ブライズ、俳句、芭蕉、蕪村、一茶、A. ハクスリー

---

R.H. ブライズ(R.H. Blyth, 1898-1964) 著 *HAIKU*(『俳句』)第一巻に見られるブライズの「芭蕉論」に続く「蕪村論」を考察する<sup>3)</sup>。蕪村はまず芭蕉と対照される。まずブライズは「両者の詩的生活の深さの違いに驚かされる」(we are struck with the difference of the depth of their poetical life)<sup>4)</sup>。芭蕉の俳句においては、「事物の本質が一種のオノマトピーであらわされ、それが深く精神的でありうる」(the thing, its nature, is expressed in a kind of onomatopoeia, which may be deeply spiritual.)<sup>5)</sup>と音声面からその精神性を理解し、「音声を持たぬ事物が句の抑揚の中で語る」(Voiceless things speak in the cadence of his verse.)<sup>6)</sup>という興味深い解釈を述べている。

一方、蕪村は単に表面的な事物(the thing-as-it-is)を描いているだけで、その「本質」(the Thing-as-It-is)を描いていないという<sup>7)</sup>。いかに感覚的に優れ、絵画的であろうとも、「言葉による絵描き」(artist in words)に過ぎず<sup>8)</sup>、この世の「真の事物」(Things)を表現してい

ないという。そして芭蕉の句には命 (life) があり、それは大文字の LIFE 「命」と呼べるものだが、蕪村の句には命はない、と言う。9)

英国作家のオールダス・ハクスリー Aldous Huxley(1894-1963) が、この “Things-as-they-Are” の体験に注目したことは、前項「芭蕉論」の注の中で紹介した 10)。そこではただ彼の手紙の一節を英語原文のまま引用したが、ここに日本語に訳出しておく。それは 1951 年 11 月 4 日、ロスアンジェルスからエリーズ・マレル夫人 (Mrs. Elise Murrell) に宛てて書かれた手紙の一節である。

R.H. ブライズという人の書いた *Zen in English Literature* (『英文学の中の禅』) というたいそう興味深い本があります。ブライズという人は日本のある大学の教授で、長年かの国に住んでいる人です。この本は、事物の本質 (Things-as-they-Are) の一瞬一瞬の体験と詩 (Poetry) との関係を扱っていて、時に少しばかり独りよがりな感じはしますが、それ以外はきわめて啓発的 (illuminating) です。(There is a very curious book by a man called R. H. Blyth, called *Zen in English Literature*. Blyth is a professor at some Japanese university and has lived in that country for many years. The book deals with the relation between moment-by-moment experience of Things-as-they-Are [and] Poetry. It is a bit perverse sometimes, but very illuminating at others.) 11)

ハクスリーはブライズの最初の著作である *Zen in English Literature and Oriental Classics* (『英文学と東洋古典の中の禅』北星堂 1942、日本語訳は 2005 年 7 月現在出版されていない) に魅了されたと思われる。ブライズのその後の著作 *A Survey of English Literature* (『英文学概説』北星堂 1950、2005 年 7 月現在日本語訳なし) に、ハクスリーの一ページ大の写真が入っており、現代作家のなかでは唯一例外的な扱いを受けている。両者の間に文通があったかと想像されるが、それを証拠づける資料を筆者らは見ていない。

以下に、「蕪村」の項の日本語訳全文を掲載する。本小論の目的は、今日見るとき国際的な俳句ブームを引き起こしたブライズの名著『俳句』が、日本の俳句、また俳人たちを、英文でどのように紹介したかを見ることにあるが、ブライズは『俳句』第一巻の中の「四大俳人：蕪村」の項では、蕪村の句には芭蕉に見られるような「事物の本質の一瞬一瞬の体験」「詩」「生命」が見られないと論じている。しかしその後の著作をみるならば、それだけではないことが知られるが、ここでは論じない。『俳句』全四巻に引かれた芭蕉の句が約 300 であるのに対し、蕪村の句は約 500 であることからそれは伺われよう。12)

四大俳人 蕪村  
R.H. ブライズ

Four Great Haiku Poets: Buson  
By R.H. Blyth

上田邦義・氏家飄乎 訳

Translated by Kuniyoshi UEDA & Hyouko UJIIE

蕪村は芭蕉(1644-1694)の死後22年、すなわち1716年に生れ、1783年末に亡くなった。その生涯の詳細は、ほんのわずかしが知られていない。愛妻家で子煩悩であったようだ。

蕪村を芭蕉と並べるとき、彼らの詩的生活の深さの余りのちがいに驚かされる。どちらも目と耳を使いはするが、蕪村の場合、いかに敏感であろうとも、事実彼は神経過敏であったが、その感覚が芭蕉のように、心の奥底に達することがないのだ。まず音声についていうなら、芭蕉の句の場合には、事物の本質は一種のオノマトピーアであらわされるといい。そしてそれは深く精神的であり得るのだ。音声をもため事物が詩の抑揚の中で声を得て語るのである。その一例を挙げよう。

秋深き隣は何をする人ぞ

*Akifukaki tonari wa nani wo suru hito zo*

It is deep autumn

My neighbour, ---

How does he live?

Bashō

(深い秋である。私の隣人は、いったいどんな暮らしをしているのだろう)

また、次の二つの詩を比べてみるがよい。

五月雨を集めて早し最上川

芭蕉

*Samidare wo atsumete hayashi mogami-gawa*

Collecting all

The rains of May,

The swift Mogami River.

Bashō

(五月の雨をすべて集めて、まことに早い最上川であることよ)

五月雨や名もなき川の恐ろしき

蕪村

*Samidare ya na mo naki kawa no osoroshiki*

The May rains:

Even a nameless stream

Is a thing of dread.

Buson

(五月の雨。名もない川でさえ、この恐ろしさだ)

芭蕉の句では、音声には触れていないけれども、濁った水が海まで猛然と流れ落ちる音が我々の想像の中で聞えるのだ。蕪村の句は彼が川に感じた何か詩的なものを語っているが、川がわれわれの全身にこだまして流れることはない。確かに芭蕉にも、聞える音の単なる記録ともいべき句がいくつかあるが、そう多くはない。その一例。

烏賊うりの声まぎれはしほととぎす

*Ika uri no koe magirewashi hototogisu*

The cuttle-fish seller's voice

Mingles with the voice

Of the *hototogisu*.

Bashō

(烏賊売りの声がほととぎすの声に混じって聞こえてくることだ。原注。Hototogisu:カッコウの一種)

蕪村の耳の鋭敏さの例として、次のような句を引き合いに出すことができる。

涼しさや鐘を離るるかねの声

*Suzushisa ya kane wo hanaruru kane no koe*

The coolness:

The voice of the bell

As it leaves the bell!

Buson

(涼しい日。鐘の音の、鐘を離れるときの鐘の音よ)

蚊の声す忍冬の花散る毎に

*Ka no koe su suikazura no hana chiru goto ni*

The voice of mosquitoes,

Whenever the flower of the honeysuckle

Falls.

(蚊のぶんんと鳴く声が聞こえる。すいかずらの花がひと花散るごとに)

しかし、少数の例外を除けば、いかにデリケートで繊細であろうと、蕪村の音声知覚はそこで停止する。これは蕪村に対する批判ではまったくない。というのは、停止するのも先へ進

むのもよいことだから。

蕪村はまず第一に眼の詩人である。彼は画家である。墨や絵の具の画家であった上に、はるかに偉大なことばの画家であった。時として、その描写はあまりに絵画的で、詩（俳句）には合わないと言っていい。

若葉して水白く麦黄みたり

*Wakaba shite mizu shiroku mugi kibami tari*

Young green leaves,  
Water white,  
Barley yellowing.

（若葉の季節。流れる水は白さが目につく。麦畑の麦は黄ばんでいる）

色に対して蕪村はほとんど貪欲ともいえる。

夕顔や黄に咲いたるもあるべかり

*Yūgao ya ki ni saitaru mo aru bekari*

Evening-glories;  
There should be also  
One blooming yellow.

（夕顔の白い花が咲いている。黄色に咲く夕顔も当然あっていい筈だ）

こうした例は多数挙げられるが、ここにはほんのわずかな例を示すにとどめる。

月に遠くおぼゆる藤の色香かな

*Tsuki ni tōku oboyuru fuji no iroka kana*

In the moonlight,  
The colour and scent of the wisteria blossoms  
Seem far away.

（月光の中に、藤の花の藤色と香りが、遠くに感じられる）

つつじ咲いて片山里の飯白し

*Tsutsuji saite katayamasato no meshi shiroshi*

Azaleas are blooming ;  
In this remote mountain village  
The boiled rice is white.

(折りしもつつじの咲く季節。街を遠く離れたこの山里では、炊き上がった飯が真っ白だ)

公達に狐ばけたり宵の春

*Kindachi ni kitsune baketari yoi no haru*

The fox

Changes himself into a young prince;

The spring evening.

(狐が一匹、突如化けて家柄のよい若い貴公子の姿であられる。なまめかしい春の宵)

貌白き子のうれしさよ枕がや

*Kao shiroki ko no ureshisa yo makura-gaya*

Happiness,

At the white face of a child

In the small mosquito net.

(しあわせな気分。枕蚊帳の中に子供の寝ている白い顔が見える)

高樓の灯影にしづむ若葉かな

*Kōrō no hokage ni shizumu wakaba kana*

The young leaves,

Drenched in the lights

Of the tall tower.

(若葉の緑が、高樓にともる灯りに浸って沈んでいる)

牡丹散って打ち重なりぬ二三片

*Botan chitte uchikasanarinu futamihira*

The peony scattering,

Two or three petals

Lie one on another.(

(牡丹が散る。大きな花びらが一つ二つ三つと。重なってゆく)

きりぎりす自在をのぼる夜寒かな

*Kirigirisu jizai wo noboru yosamu kana*

The cricket

Climbs up the pot-hanger;

The night is cold/

(一匹のこおろぎが、囲炉裏の上に吊された自在かぎを、のぼっている。寒い夜だ)

金屏の羅は誰れかあきの風

*Kinbyou no usumono wa tare ka aki no kaze*

Over the gold screen,

Whose silk gauze dress?

The autumn wind

(金屏風にかかっているのは誰の絹の薄物か。秋風にひらひらしている)

一言でいえば、蕪村は現象世界に生きたのだ。彼の精神生活は芭蕉のそれともし比べるなら、薄いものであったということになる。次の二つの句を見るがよい。

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

*Furuike ya kawazu tobikomū mizu no oto*

The old pond:

A frog jumps in,---

The sound of the water.

Bashō

(古池がある。そこに一匹の蛙が飛び込むと音がして、また静かさが戻る)

古池に草履沈みてみぞれかな

蕪村

*Furuike ni zōri shizumite mizore kana*

The old pond,

A straw sandal sunk to the bottom;

Sleet falling.

Buson

(古池がある。底に草履が沈んでいる。折りしも霙(みぞれ)が降る)

芭蕉の句には生命 (life) がある。そこには大文字で書くべき生命 (Life) がある。蕪村の句はその意味では死んでいる。草履のある場面の侘しさは表に見えるだけのものではないのだが、この句にはこの世の一切の侘しさが包含されていない。それはあるがままの物 (thing as-it-is) ではあるが、大文字で書くべき「あるがままの物」(Thing as-It-is) ではない。われわれは自分の性格とか気分によってそのどちらかを選んでいる。

芭蕉と蕪村のもう一つの根本的な対照は次のようなことである。芭蕉の場合、彼の禅理解、中国詩の影響、和歌詩人の作品、それらすべてやその他さまざまな事柄が、彼の知性に、また生活体験の中に溶け込んでいる。同じことは一茶についても、恐らくはより大きな真実味をもってそう言うことができる。だが蕪村については、また子規についても、それらは詩作に用い

られたり模倣されたりはするが、作者の人間の一部とは決してなりえていないのだ。

蕪村は芭蕉のあとに従い、子規は蕪村のあとに従う。だが、芭蕉と一茶は誰をも模倣しない。彼らの生活は彼ら独自のものである。

## 注

- 1) UEDA Kuniyoshi・UJIIE Hyouko, “R.H.Blyth’s View on Haiku: Basho”, *The Bulletin of the International Society for Harmony and Combination of Cultures* Vol.4, 2005, pp.36-51
- 2) R. H. Blyth, “Buson”, *HAIKU Vol. 1 Eastern Culture*, 1949, Hokuseido, pp.299-302
- 3) 同上
- 4) 同上 p.299
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) 同上 p.302
- 8) 同上 p.300
- 9) 同上 p.302
- 10) 『融合文化研究』第4号、p.49
- 11) 同上 p.49
- 12) *HAIKU, Vol. 4, Autumn-Winter*, 1949, Hokuseido, pp.1291-92,

## 参考文献

- R. H. Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics*, Hokuseido, 1942
- R. H. Blyth, *HAIKU* 4 Vols, Hokuseido, 1949-1952
- Kuniyoshi Munakata, “The Most Remarkable American: R. H. Blyth on H. D. Thoreau”, *Otsuka Review* 9, 1972
- Kuniyoshi Munakata, “R.H.Blyth Bibliography with Quotations”, *Reports of the Department for Liberal Arts, Shizuoka University* Vol.8, 1973
- Grover Smith ed., *Letters of Aldous Huxley*, Chatto & Windus, 1969
- The Bulletin of the International Society for Harmony and Combination of Cultures*, No.4, ISHCC, 2005
- 星野慎一 『俳句の国際性 - なぜ俳句は世界的に愛されるようになったかー』 博文館新社、1995